巻頭言

〈小特集〉「龍」のように奔出する〈新たなアジア〉と〈新たなツーリズム〉

Special Issue：“New Asia” and “New Tourism” gushing out like Dragons

現代において、地域や観光は、グローバリゼーションとローカライゼーションが重層的にせめぎあう中で成立するようになっている。地域研究も、観光研究も、今やそうしたすがたをとらえていかなくてはならず、これまでになく大きな刷新（innovation）がもとめられている。では、新たな地域研究や観光研究とは、一体どのようなものであり得るのだろうか。

地域や観光は固定されたものでも所与のものでもなく、絶えず新たに構築され続けているものであると言えよう。このことは〈アジア〉をキーワードとすることで、鮮明に浮かび上がるのではないだろうか。地域や観光を固定的なものとして、実定化してとらえるのではなく、グローバリゼーションとローカライゼーションが重層的にせめぎあう中でつねに変化にさらされている中でとらえていくこと――空をうねりながら飛ぶ「龍」のように、そのかたちをつねに変え続けているアジアのコミュニティ（地域）や、アジアをめぐるツーリズムのありようは、そのことを可能とさせてくれる事例である。そこで本特集では、アジアを事例に新たに奔出する地域や観光のすがたを把捉しようと試みた。

まず安田論文「ヴァンクーヴァーにおける華人コミュニティと華人秘密結社洪門民治党の現状」では、カナダのブリティッシュコロンビア州ヴァンクーヴァーの華人コミュニティに焦点を当てつつ考察を展開している。安田

論文は、19 世紀から現代にかけてのカナダの華人社会の変遷を概観したうえで、中国語資料と現地での聞き取りをもとにカナダにおける洪門の歴史と現状を論じている。

次に藤巻論文「チャイナタウンはもはや“チャイナタウン”ではない！“外国人労働者の街”だ！――クアラルンプルの〈ツーリズムスケープ〉瞥見」では、マレーシアの経済社会が外国人労働者によって成り立っている現状を、クアラルンプルの観光において最も人気のあるチャイナタウンの〈ツーリズムスケープ〉（tourismscape）を、「遊歩者（フラヌール：flaneur）」的目線を通して描き出している。

そして張論文「日本における中国人のコンテンツツーリズム――安倍晴明に関する「聖地巡礼」を事例に」では、訪日中国人によるコンテンツツーリズムについて考察しようとしている。近年、中国人による訪日観光にあっては個人旅行者が増加している。こうした傾向のもと、アニメやゲームをはじめとするメディアコンテンツに登場する日本の場所を訪れる中国人も、目立ち始めている。本論文は、そうしたコンテンツツーリズムを行う訪日中国人のすがたを描写している。

さらに神田論文「『Pokémon GO』が生じさせる移動と観光振興」では、2016 年に発表された『Pokémon GO』というゲームアプリが生み出した新たなる移動と観光振興の関係性について考察を展開している。その際に、ナイアンティックが最初に観光振興への同ゲームの活用を謳って取り組みを実施した、東北地方太平洋沖地震による被災地域の宮城県石巻市における状況と、自治体として最も早く同ゲームを活用した観光振興への取り組みを行った鳥取砂丘について検討を行い、観光研究の新たな方向性を模索している。

最後に井澤論文「Tourism Development and Its Social Impacts in Bali, Indonesia, in the Post-Soeharto Era」では、ポストスハルト時代のインドネシア・バリを事例として、観光開発が社会的にどのようなインパクトを与えたのかを明らかにしようとする。バリはインドネシアにおいて最もポピュラー

な観光地であり、「神々の島」「最後の楽園」等とされている。しかしながら観光開発が進められてきたことで、この地域に大きなインパクトがもたらされた。本論文では、そのことをつまびらかにする。

以上の論稿がひとつのきっかけとなって、地域研究、観光研究、そしてアジア研究に関する、より活発で刺激的な議論が巻き起こってくれることを期待したい。――多種多様な諸研究が、まさに「龍」のように奔出しながら。

2019 年 2 月

立命館大学文学部教授・人文科学研究所所長
遠藤　英樹